

教えることは学ぶこと

今泉守正

千葉県立幕張総合高等学校 教諭

1983年 筑波大学体育専門学群卒業

「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない。」これは、フランス元代表監督のロジェ・ルメール氏(2001年に筑波で開かれた第2回フットボールカンファレンスの講演にて)の言葉である。

ルメール氏は、この講演の冒頭で、常に学び続けていくことは、指導者の仕事を遂行していく際に1番重要であり基本的なものと述べている。私は、大学を卒業して高校保健体育科の教師として20年間勤めてきた。切り刻まれすぎた時間を、跳んで、飛んできた私にとって、心に響くものであった。

時を追って確認してみようと思う。

～筑波大学での4年間～

私は、体育専門学群第6期生として筑波大学に入学した。広大なキャンパス、そして、大きな建築物であった体芸棟。今、まさに創りつつある学園都市という趣であっ

た。私は、これから始まる大学生活に大きな期待と不安に胸を膨らませていた。そして、サッカー部。当時の監督は松本光弘先生。松本先生がミーティングの際に常に力説されていたことがある。サッカー部創設からの歴史と伝統。「校庭に一組のゴールポストを」を合言葉に全国で様々な努力をされている諸先輩方のこと、日本サッカー界の中での筑波大学サッカー部の役割、存在価値、それ故に持たなければならないクラブ・チーム・個人としての自覚と責任。夢や目標を持つ事。筑波大学サッカー部の使命として、強いチームを作り、良い選手を育成し、良い指導者を養成する事、そして、これらの事を具現化していくためには、一人一人の部員が、サッカー選手としての能力の向上、大学生としての基本的な生活習慣の徹底、「非常識の常識化」をモットーに、文武両面にわたって全力を注ぐことが不可欠である事を部員に説いておられた。

トレーニングの中で忘れられないものがある。1年生の夏に実施された『熱中行軍』と称する夏の炎天下での、大学サッカー場から筑波山山頂へ、そして再び大学サッカー場へ戻るというゴミを拾いながらの体力トレーニングである。4年生から1年生まで縦割りにグループを作り、朝7時に大学サッカー場に集合。それぞれグループごとに出発。一人一人が大きなゴミ袋を手に、歩き続けた。再び大学サッカー場に戻れたのは、夜7時を過ぎていた。サッカーをする事だけがトレーニングではなく環境を整えていく事の大切さを学んだトレーニングであった。

～大学での4年間をベースに～ 初任の頃

大学を卒業し、千葉県の高校に着任した。大学での4年間をベースに教育現場に立ち、指導を開始した。大学では、理論と技術を学んだが、実際現場では様々な意思を持ち行動する生徒を前に、問題点が出てくる。最初の5年間ぐらいはそれでもがむしゃらに取り組んで過ぎていった。私自身が、30代に入ると自分の中で様々な壁が見えてくる。具体的には、生徒指導、教科指導、部活動指導等。自分は一体大学で何を学んできたのだろうか。実践に使えるものが何もない。正直言ってどうして良いのか途方にくれてしまう時もあった。

～見えてきた壁～

30歳を迎えて

サッカー部の指導について。当時は、高校サッカーが花形だった。高校選手権の決勝は、当時の日本のトップリーグであった日本リーグよりも観客が入り、選手達はスター扱いである。選手も指導者も高校選手権に勝つことが最優先され練習に明け暮れた。私も、母校に帰り、この選手権に勝つことを最優先した指導に全力を注いだ。しかし、その練習の内容はどうだったのだろうか。サッカーでもっとも大切な判断を奪った独りよがりな練習の連続であった。サッカーの楽しさを奪い、選手は勝つことだけに執着する。高校サッカーが終わると燃え尽き症候群に陥る。高校年代は育成期のカテゴリーであり、将来選手として完成期にスケールの大きな人間として育っていくのだろうか。選手の判断を求めない一方的な指導ばかりでよいのだろうか。私自身悩みに悩んだ。生徒を思う一方自らをも振り返った。大学時代になぜもっと勉強しなかったのか。そして、その時改めて大学で勉強したいという気持ちになった。

～筑波大学サッカー場に戻る～

(30代を折り返して)

大学に入学したときの4年生の先輩方が、春休みに各高校を集めて筑波カップを行っているから来ないかという誘いを頂いた。

それぞれ、指導者となり指導に明け暮れていると思うが、筑波の地に集まり、皆で勉強会をしないか。指導者としての質の向上を目指して、自分自身を再教育してみよう。ということであった。昼は、ゲームをしながらそれぞれのチームの狙いや取り組んできたことの意見を交わす。ハーフタイムでは、何を指示したのか。試合終了後はそれぞれのチームの良かった点、改善点を指摘しあう。夜は、自分自身の取り組みを発表しディスカッションをする。松本先生をはじめ、森岡先生、山中先生、萩原先生の諸先生方もお忙しい中グラウンドに足を運んでくださり、様々なアドバイスをしていただいた。まさに自分にとっては、自分自身を見つめなおし、試行錯誤していた状況から一つ一つ課題をクリアーしていくきっかけとなった。筑波に通って持ち帰った財産が一つ一つ積み重なって、4年前、1999年インターハイで初優勝することが出来た。

～再び筑波大学に学ぶ～

今 40代

20年を終える節目の年に、今まで取り組んできた教育を見つめなおし、自らを再教育して、新しい時代に対応するべく長期研修を志した。20年ぶりの学び舎。大学移転時に整えられた街路樹は枝々を伸ばし、4半世紀を過ぎた今、この新緑の季節、緑のトンネルとなっていた。今日も自宅から140

キロの道のりを通う。行きの期待と帰りの充実感とは、距離と時間を感じさせない。

指示を受けないと行動できない生徒が増えてきている今、子供の頃から自らの考えを持ち自らの判断で行動する習慣を身に付けていくことが大切である。教育の現場では、新しい教育理念は「生きる力の育成」であり、それは以下の3つの内容であると述べられている。

自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力。

自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性。

たくましく生きるための健康や体力。

今、まさに指導者の力量が求められている。

冒頭にも述べたが「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない。」この言葉を忘れずに学び続けたい。

最後に、いつも受け入れていただいていた懐の深い筑波大学に多謝。

いまいずみ もりなお